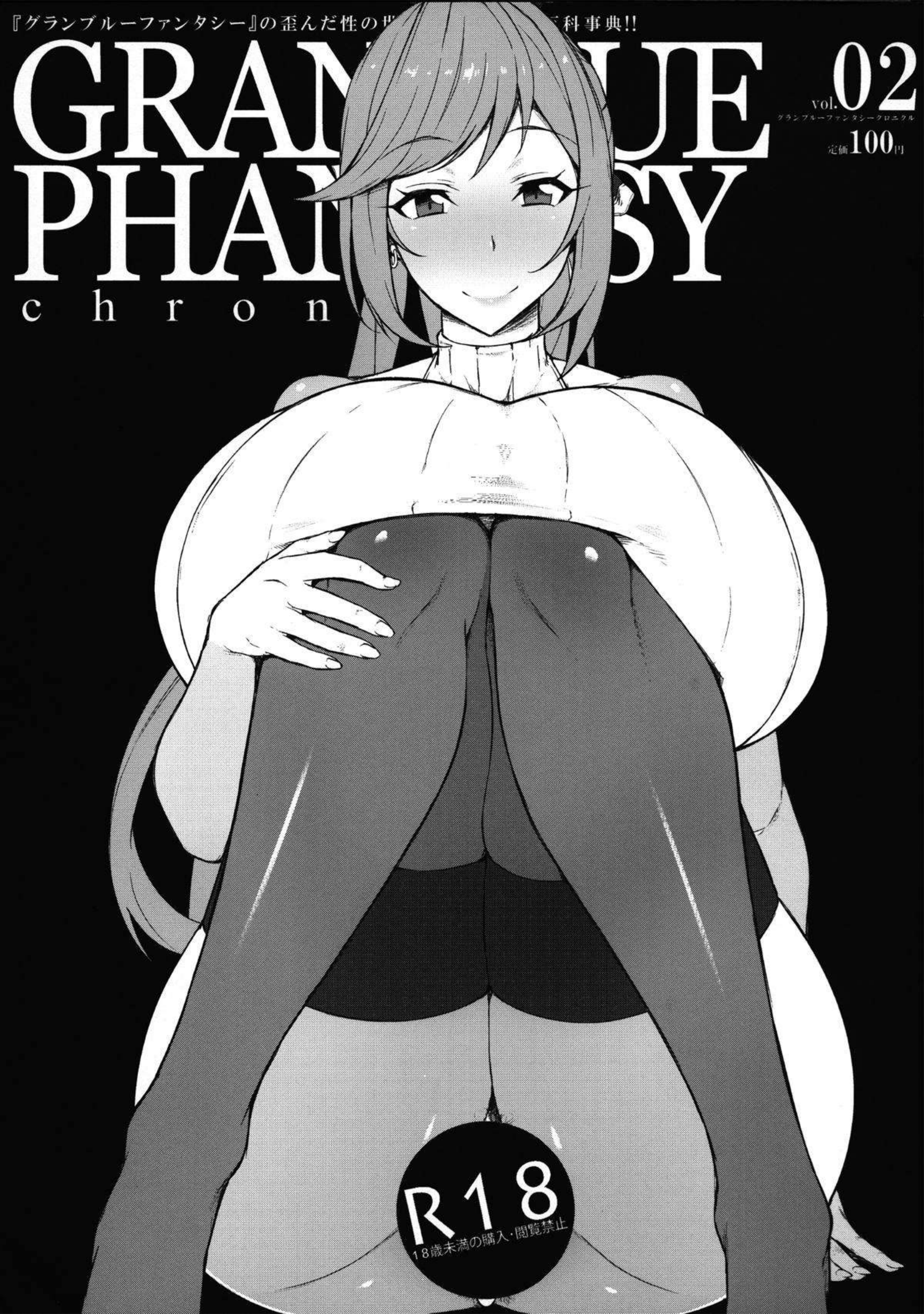
『グランブルーファンタシー』の歪んだ性の世界を百科事典!!

GRANBLUE PHANTASY chronicle

vol.02
グランブルーファンタシークロニクル

定価100円



「団長」

ジータが自室に戻るとクラリスがいた。
下着を脱いで肥大化しきった小陰唇を
見せるけるかのような姿勢で座っている。

「時間あるよね？ちょっとつきあって♥」

クラリスは他人に自分のオナニーを
見せると興奮するらしくたびたび
ジータの部屋でこうして待っていた。
部屋は既にクラリスの淫臭が満ち、
なんらかの錬金術も施されており
ジータは断ることができなかった。

「んっ…あはぁ…♥
やっぱ団長に見られながらするのは最っ高ぉ…♥」

クラリスは小陰唇につけたピアスを脚でひっぱり
膣内をジータに見せつけながら乳首を弄っている。
得体の知れない錬金術の効果か、ジータの目はクラリスに
釘付けにされており動くこともままならない。

「効いてる効いてる…前よりずっと効果が強いでしょ？
最近錬金術のいい練習法を見つけたからね…んっ…♥
そんなに…悪い気分じゃないでしょ？」

ジータの胸は感じたことのない感情で
いっぱいになっていた。こうしてクラリスの
オナペット同然にされている自分に
悦びのようなものを感じていた。

「はぁっ…ぁ…っ…♥
…今日はこの後うちの部屋に来てくれないかな
見せたいモノと相談があるの」

いつもは勝手に訪れて気が済んだら帰るクラリスだったがこの日は違った。
こうして誘われるのは初めてのことだった。
ジータは答えなかったが、クラリスニコっと笑って部屋を出るとジータもそれに黙ってついて行った。

クラリスの部屋もやはり淫臭で充満していた。
臭いはクラリスのものだけではないのがわかった。
薄暗い部屋の奥からはうめき声のようなものも聞こえる。

「こっちに来て」

クラリスにそう指示されて奥に進むとそこには拘束具に身を包んだ
コルワがクラリスに足蹴にされていた。
そして彼女の股間には本来あるはずがない巨大な男性器がそそり勃っていた。

「んむぐっ…んん…んん……っ♥」

コルワが微かにうめき声をあげて悶ているが、どこか嬉しそうだった。

「これが今うちのお気に入りのおもちゃ。ああこっちじゃなくてコレね。
今挿れてるのもお気に入りではあるんだけどね。」

クラリスは膣内に巨大なディルドーを
出し入れしながらコルワを踏みつけて言った。
玩具とは拘束されたコルワのことを
言っているのだろう。

「かわいそうだと思う？そんなことないよ
コレはこうされるとすっごく悦んでるんだから
そうだよね？」

「んぶぎぃーっ♥ぶふっ…んふぐぎぃーっ♥」

ジータが知っているコルワからは想像できない豚のような
うめき声を聞いて今度ははっきりわかった。
彼女は嬉しいときにはこう答えるように調教されており、
心からこの状況に悦びを感じていた。

「錬金術の練習してるって言ったよね？これがその成果…
肉体の内側の魔力の流れをうちの錬金術で壊して違う形で再構成することで
ヒトはこうなっちゃうの。壊したモノを元に戻すのは苦手だけど歪んだ形に
変えるのはもうお手の物だよ。このチンポもよく出来てるでしょ？
ちゃんと射精して妊娠もさせられるんだから♥
奥にコレに妊娠させたモノもあるけど見る？」

どうやらクラリスに壊され玩具にされた団員はコルワだけではないようだった。

「それで相談なんだけど…」
ジータはベッドに押し倒された。
「団長もうちのおもちゃになってよ」
ジータの顔面にクラリスの巨大な乳房が
覆いかぶさってくる。
ジータの口内に乳首がねじ込まれ
そこから母乳のようなものが吹き出して
ジータはそれを無意識に飲み込んでしまう。
「もう何人も勝手におもちゃに
しちゃったけどこれ以上団長に
無断でおもちゃを増やすのは
流石に無理があるからさ
団長自身をうちのおもちゃに
しちゃおうかなって」
ジータの胸が膨らみ
股間から男性器が生えてきた。
ジータはそれを握りシゴき始めた。
「大丈夫…団長は特別だから。
元々この騎空団に入ったのだって
団長みたいなコをおもちゃに
したいなーって
思ってたからなんだよ？
さっきのおもちゃみたいに
乱暴にはしないよ。
その代わり団長には
うちのおもちゃを増やす
手伝いをしてもらうから。
団長はみんなに信頼されてるからね
ふふふっ…♥」
クラリスと自分の男性器が奏でる
粘っこい音以外はジータの頭に入らなくなっていた。
それがジータのすべてになっていた。
クラリスに従うことが何よりの快感、幸福だった。

QQ1
Q11

数ヶ月後――

クラリスの前にはポピー、ロゼッタ、マギサが拘束されていた。
三人の股間にはやはり巨大な男性器がぶら下がっていた。

「んんんーっ！んんっ！んんんっ！！！」
「んふぅっ…んぶぶっ…んふぅぅぅぅっ！！」
「んもぐっ…んごおっ！んぶほおおおおっ！！！」

三人が音でクラリスが来たことに気づき
何かを求めるように身悶え、うめき始めた。

「このあたりはもう一ヶ月モノかぁ…
ふふふっ…どれにしようかなぁ…♥
…ロゼッタのチンポが一番パンパンで射精したそうだね
よーし今日はロゼッタにしよう！」

クラリスはロゼッタの拘束の一部を解き始めた。

「んんんんんぐ…っ！んぐんんんっ！！」
「んふぅーっ！んぐぶっ…んごごごっ！！」

クラリスに選ばれなかったポピーとマギサは
それぞれ苦悶の声を上げた。

「ばぶはぁああっ…♥クラリス様ぁ…♥
御慈悲を頂きありがとうございますぅぅぅっ！
ぶひひぃぃぃいんっ！」

口の拘束を解かれたロゼッタは
開口一番クラリスへ感謝を述べた。

「よーしいい子いい子♥
はいこれうちがさっきオナニーに使ったディルドー
舐めていいよ」

ロゼッタの口元にクラリスの淫液で濡れたディルドーが
突き出されるとロゼッタは犬のようにそれを嗅ぎ、しゃぶり始めた。

「んるるるるぉっ…ありがとうございますっ！
ありがとうございますぅぅぅぅっ！
あふぁっ…んじゅるるっ…美味しいっ…♥
クラリス様のお汁美味しぃぃぃぃっ♥♥
はふっ…はふぁぁあっ…んぶひっ♥ぶひゅひぃぃぃぃっ♥♥」

クラリスがロゼッタの男性器に差し込まれた
プラグを抜くと勢い良く精液が吹き出した。

「ぶひょひぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃっ♥
ぶひぃっ♥ぶひぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃんっ♥」

「あっは♥いい出しっぷり♥さすが星晶獣は人間とはモノが違うね
今日はこれを見ながらオナニーしよーっと♥」

壊れた蛇口のように精液を吐き出し続ける
ロゼッタを見ながらクラリスはオナニーを始めた。

発行日 2016/12/31
発行　GFF/栗林クリス
印刷　ねこのしっぽ
E-Mail qlinicx@yahoo.co.jp
pixivID 612101
※無断転載・無断複製、及び未成年者の購読閲覧を禁じます

GRANBLUE PHANTASY
chronicle